会員のひろば

題字・高柳　眞子

◇わが「半」祖国であるウズベキスタンにも十二支があります。今年は「ｏｔ＝馬の年」です。

さて「ワイルドホース」の安倍政権の「逆走」（某党の言う「暴走」は間違いです。方向がはっきりしているので「逆走」が正解です）に「抗う」ために何をすべきかが問われます。

小生は、中学生の頃（１９５７年？）新聞で知った東京都砂川市（現立川市）の砂川闘争における「土地に杭は打たれても心に杭は打たれない」の精神を受け継ぐべく小さな決意をしました。沖縄・辺野古のすわり込み阻止行動も辞さないというある組織に加入しました。本土人（ヤマトンチュ）も現地での寝泊りを覚悟して、「拠点」を確保しました。

今年からが正念場でしょう。１９６０年６月15日午前零時に国会正面前で現安保条約の「自然承認」を見つめた者の責任です。老骨に鞭を打って!!「群馬事件」を想起しています。

（東京都・胡口　靖夫）

◇平和を守るために貴重な証言をしようと決意しております。

（渋川市・中村　幸生）

◇今月は、高崎アニマルランドの記事がとても印象深かったです。今の犬を飼う前に、夫と「犬は買うものではないよね」と常々話し合っていました。なので、譲渡会の情報などを調べるなかで高崎アニマルランドのことも知っていました。なかなか日程が合わず、自宅から遠いので、参加する機会はなかったのですが、記事を読んでいて、「もし行っていたら…」と思わずにはいられませんでした。と同時に、こんなことも思い出しました。

近くに住む二人暮らしの両親の生活に笑顔が出るような柔らかい潤いが必要なのではないか…と悩んでいた頃でした。長い通勤途中に、野良の子犬を発見したのです。毎日その車の通りが激しい道を通るたび、ひかれやしないかとても心配でした。ある朝、その子犬が足を引いている姿を目撃しました。心配でたまらなくなり、近くの店で水と餌の容器とリードなど一式を買い、いつでも保護できるよう準備しました。しかし、いざ準備ができたら、今度はなかなか見つかりませんでした。墓地に入り込んだり、古い犬小屋を覗き込んだりもしました。一週間くらいは夫に内緒でさがしましたが、ついに、これまでのいきさつを伝え協力を求めました。それは、季節外れの台風の後、子犬が無事に乗り切れたか、雨で風邪をひいてなどいないだろうか…と心配でたまらなくなったからでした。休日返上で朝から夫と二人で探しに出かけ、一時間以上探しました。でも、結局見つかりませんでした。そして、失意の帰り道。毎日通っていた通勤路の脇に「犬屋さん」という看板が見えたのです。これまで何回も通っているのに、この時初めて気づいたのです。結局、そこで現在の愛犬「タバサ」に出会うわけです…まるで「運命の気まぐれ」が導いたかのように。そして、結果的には「買って」しまいました。タバサのお陰で、今は両親はもちろん、みんなが笑顔になっています。

この話には、後日談がありまして…。半年か一年くらいたった時に、偶然あの時の犬かと思われる犬を見かけました。近くには大学があり、いつも運動部の学生がグラウンドで練習をしていました。そこのユニフォームを着た学生さんの一人が、あの子犬のリードを握っていたのです。私が笑顔でその脇を通り過ぎた事は言うまでもありません。

（高崎市・戸澤　由美恵）

（順不同／敬称略）